19.子ども食堂が担い手となる現代社会と可能性：
子ども食堂でのボランティア体験、ゼミでの学びを踏まえて

藤本涼花

はじめに

説得力には欠けるものの「貧困や孤立があるから子ども食堂が急増した」という説明が存在している。確かに、「貧困や孤立に見舞われる子どもが実際にいるのだ」という問題を知った人たちが、「何かしたい、何かできることはないだろうか」という気持ちが発生し、それが子ども食堂という具体的な形を成して取り組まれているのは事実である。
では(急増した)子ども食堂が、実際に貧困や孤立の解決に至っているのだろうか。貧困と孤立のそれぞれの面からの考察をした。

1.貧困面へのアプローチ

そもそも子ども食堂は果たしてダイレクトに困窮世帯の子どもを救う手立てになっているのだろうか。そこで、子ども食堂が困窮世帯の子どもへのアプローチがなされにくい要因を自分なりに挙げた。それが以下の 3 点である。

〇どの子ども食堂も月 1 開催がほとんど

名古屋市に点在する子ども食堂は 59 箇所。「名古屋市内の子ども食堂一覧(令和 2 年 1 月 1 日現在の情報)」への掲載の承諾を得た子ども食堂のみの値となる。夏休み・冬休み・春休み開催、おおよそ月 2〜3 開催、不定期開催などの子ども食堂も何箇所か見受けられたものの、この 59 箇所のうち半数以上もの子ども食堂が月 1 開催あるいはそれ以下の頻度での開催であった。

子ども食堂の月 1 開催によって子どもが食事を提供される頻度としては、あまりにもまかないきれているとは言えない。1 ヶ月(＝30 日)の間に 1 日 3 食の食事を取るという計算は、30×3＝90(食)である。したがって月 1 開催の子ども食堂へ通う子どもが、子ども食堂での食事する機会に恵まれるのは、1 ヶ月あたり 1/90 食というごくわずかであることは言うまでもない。

〇子ども食堂はそれぞれ地域に少ない

まず名古屋市の 16 区すべてに子ども食堂がそれぞれ存在していることは明らかである。(名古屋市内の子ども食堂一覧より)そこで子ども食堂までの交通手段について考えてみる。子どもが自らの力で子ども食事へ通うためには、徒歩か自転車が一般的であろう。自家用車であれば身内の大人による運転を要する。しかしバスや電車といった交通手段では交通費を要する。そのため交通費を払ってまで子ども食堂へ参加しに来る利用者は恐らくごく少数なのではなかろうか。

では子どもが「通いやすい」と思える圏内に果たして子ども食堂が存在しているのか。名古屋市 16 区すべてに子ども食堂が点在していようとも、区内を分割する通学区域に子ども食堂が意識的に点在している訳でもない。子どもたちが「通いやすい」と思える圏内が通学区域内であると仮定するならば、名古屋市の子ども食堂 59 箇所は決して多いとは言えないのではなかろうか。

実際に私の地元にある小牧子ども食堂は、恐らく小牧市に 1 箇所のみの小牧唯一の子ど

も食堂である。私は昨年の 4、5 月にこの子ども食堂に伺ったことがある。この小牧子ども食堂は小牧の中心部に位置しているものの、すべての小牧市の子どもたちが通いやすいかと言われれば肯定はできない。しかし小牧子ども食堂は昨年 7 月に終わったことが Facebook の投稿にあった。小牧に存在していたはずの子ども食堂が今となってはもうない。以上名古屋市と小牧市の例より、それぞれの地域に子ども食堂は少ないと言える。

〇子ども食堂は必ずしも無料ではない

「子ども無料」をうたう子ども食堂が多い中で、「子ども有料」の子ども食堂も存在する。名古屋市の子ども食堂 59 箇所中、「子ども無料」の子ども食堂は 37 箇所、「子ども有料」の子ども食堂は 22 箇所であった。（名古屋市内の子ども食堂一覧より）

実際に「子ども無料は貫きたい」とお考えのわいわい子ども食堂の杉崎さんと「子どもからもお金はとるべきだ」とお考えのなかよしごはんの速水さんといった、参加費に対する信念が対照的な子ども食堂運営代表の方々がいることもまた事実である。子ども有料にする子ども食堂の動機としては様々であることに違いはないが、やはり参加費 100～300 円すら払うのが困難な子どもも存在するのではないか。仮に「子ども食堂＝困窮世帯の子どもを救う」という概念であったとすれば、子ども食堂は少なくとも子どもに対しては「無料」であるべきではなかろうか。

困窮家庭の子どもの食事状況としては、家庭ごとにその度合いが異なる。そもそもほとんど食事が与えられないケースもあったり、学校給食以外の食事はほとんど取っていなかったり、1 人で食事していたり、栄養のない加工食品やインスタント食品や惣菜弁当ばかりで食事を済ませてしまったりといったケースなど多岐にわたる。ある家庭では家族そろって栄養バランスのとれた食事を取っている一方で、食事はできているもののそれらの内容と比較した際に貧困に相当するケースが相対的貧困といえる。そういった相対的貧困の子どもたちを対象にいかにも模範的な家庭での食事を子ども食堂が再現できるかと言われたら、そうはいかない。各地域に子ども食堂が点在しまくり、子どもが通いやすい範囲内で、毎日日替わりで子ども食堂へ赴き食事を済ますかあるいは、毎日開催される子ども食堂で 3 食分の食事を満たす。そういった夢物語のような子ども食堂の未来が今後やってくる見込みはなければ手段も全く考えられない。したがって、先述したどの子ども食堂も月 1 開催がほとんどであり、子ども食堂はそれぞれ地域に少なく、必ずしも無料ではないという以上 3 点から、相対的貧困の子どもたちの食事が抜本的な改善へと直結するとは言えない。つまり、子どもの貧困対策としての子ども食堂とは、あくまでも絆創膏的な一時しのぎの治療法でしかないと言える。

2.孤立面へのアプローチ

子ども食堂は 2012 年に始まったとされている。東京都大田区の八百屋の店主が、貧困や親の多忙からご飯を満足に食べられない子どもが増加しているということを知り、自らが経営している八百屋の一角に子どもたちが食事をできるスペースを設置したことがきっかけとされている。最初は、食の偏りを解消するために栄養のバランスが取れた適切な食事を振る舞われた。それが、地域の 50～60 代を中心に子どもを見守る一環や地域振興として、人々が子どもと交流する機会を提供する場として広まった。（グッドゥマガジン こども食

堂が貧困の子どもを救う！始まったきっかけや現状とは より）

子ども食堂の運営側が口々に言う、「『子ども食堂って貧しい子が来る場所でしょう？』という認識がなくなってほしい」という言葉がある。恐らく朝日新聞での「民間発の取り組み。貧困家庭や孤食の子どもに食事を提供し、安心して過ごせる場所として始まった」という記述が間違った古いステレオタイプを引き起こしてしまった要因かと思われる。そこで私は子ども食堂の現段階のこういったステレオタイプの打破は可能であると考える。むしろ、現在進行形でこの偏見が変わりつつあると考える。

なぜなら、私が参加するわいわい子ども食堂ではこうした偏見はほとんど一切見られないのはもちろん、世間が子ども食堂をインターネット検索した際にまず閲覧するであろうWikipedia での子ども食堂の冒頭説明には「貧しい」といったニュアンスの言葉が使われていないからだ。

このようにして貧困対策・食育の域はすでに超えて、子ども食堂の現状としては子どもの居場所づくり・異世代交流の段階へシフトしているのではないか、と感じられる。

そもそも孤立を感じた人間は無意識に居場所を見つけようすると心理が働くと考えられる。個人差はあれど、新たな居場所先としてはネット世界や習い事や地域社会あたりか。私には、家族やバイト先、大学(の中でもサークルやゼミなど)、といった居場所に加え、過去のつながりも持つ。過去のつながりとは、主に小中高に築いてきた関わりのことである。現在の自分が居場所を多く持てているのは、歳を重ねるごとに過去のつながりに居場所が加わるからこそにある。一方その反面で、子どもが持てる居場所は想像以上に少ないのではないかと感じると同時に、子どもが自らの力で居場所形成をするのは困難を極めるのではなかろうか。例えば、ネット世界につながりをもとめようとしてもその媒介をするネット環境を所持している子どもでなければ不可能であるし、子どもが習い事をしたくても習い事に寛容である親でなければそもそも習い事を始められない。したがって子どもたちがやむを得ない状況を脱却し、居場所を求めやすい環境を整えるのは大人の役目にこそあるのではないか。

さらに貧困と居場所をからめて、「子ども食堂に来てくれた子どもの中から『実は困窮世帯の子ども』を見つけられるかが困難」と速水さんはおっしゃっていた。やはりこの状況になった過程には誰しもが参加しやすい食堂づくりを目指したからこそにあり、そうなっていけばいくほど多くの利用者が食事に来て、本来的に支援を必要としている経済的に困難な家庭が埋もれてしまう。まさに子ども食堂のジレンマとも言える。子どもたちを大きなふるいにかけた時にこぼれ落ちた子を見つけるには、子どもが子ども食堂に自らを呈示するのか否かと、そうした行動を取りやすいと思える雰囲気づくりが各々の子ども食堂でなされているかに関わると思う。

おわりに

世間一般に呼ばれているこの「子ども食堂」。子ども食堂という名前にしているからには主に子どもに食事提供をする場。大人同士が誘いあって利用する場所ではもちろんない。あくまでも子どもが主役であることは言うまでもない。

しかし、脇役（＝ボランティア）として子ども食堂に関わる身として声を大にして言いたいことはある。私は学生ボランティアとしてわいわい子ども食堂と関わりを持たせてもら

っているが、「私はここにいていいんだ」と前向きな気持ちと主要メンバーになりつつある自分に嬉しく感じている。自分の居場所ができて同時にこの子ども食堂ではボランティアを定着させ、子どもやその親だけではない私たち学生ボランティア、さらには中年ボランティアの方々の居場所形成がなされていると感じことも多々ある。家族でも学校でも職場でもない、第3の居場所としての子ども食堂は潜在的な可能性の1つと言える。

また、子ども食堂が増加するメリットとして大きな理由は、実際に子どものために立ち上がろうとする人を増やすことであり、その先に子どもが様々な出来事で困っている時に対応してくれる場所が増えていくことである。「あそこに行けばなんとかなる」という高いレベルでの支援やノウハウが多い子ども食堂を中心に期待が寄せられる。「大人ができること」と「子どもたちが必要としていること」を照らし合わせ、熟考し、試みとして行動に移す過程が、子ども食堂を担う現代社会の在り方ではなかろうか。

【参考文献】

・名古屋市内の子ども食堂一覧(令和2年1月1日現在の情報)
・子ども食堂-Wikipedia、https://ja.m.wikipedia.org/wiki/子ども食堂(参照 2020年1月30日)
・gooddo『 こども食堂が貧困の子どもを救う！始まったきっかけや現状とは 』、https://gooddo.jp/magazine/poverty/children_proverty/children_cafeteria/2077/(参照 2020年1月30日)
・『「子ども食堂」は、「おとな食堂」になっていないか？－大人の理想と都合で開店して閉店！子どもの声なき声に耳を傾けて！』、https://children.publishers.fm/article/12350/(参照 2020年1月30日)